

2224

古今

繁

野

話

三

五 白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話

古人云、鬼神と山魅の類と幽現の別あり。山魅、本客岡、兩猿、狐、乃  
 類、皆形體ありの物。時ありて形を隠し、時ありて形を現し、是より  
 一靈明を使ふは巧拙の分あり、巧なるは物を殺使し、人の氣を發じ  
 い、拙きは、靈と依ると人、殺せざる。鬼は人、殺して土中、埋めらる。骨  
 肉は土、屬し、其氣は發揚し、空にあり、或鬼の神といふ。體なくを  
 なる。是より尚、異常あり。若るは、氣を降し、嚮き、人の心、交  
 り、近うて、其跡なし。異なるは、人、托し、と語り、人、附て、靈なりし。此  
 形體、われ、人の、形、なり、身、然、然、然、靈、を、示、せ、は、人、の、心、を、  
 と、ま、よ、と、玉、かり、の、儀、鬼、の、虎、よ、使、り、と、狗、牝、の、人、の、心、を、  
 元、を、ける、人、並、種、の、者、情、の、物、皆、神、あり、て、物、は、附、き、人、に、托、し、

○英紳傳後編卷之三

る。ふ、死、鬼、の、神、より、靈、なり、將、身、と、先、ふ、人、の、心、を、後、よ  
 と、是、生、者、の、天、情、よ、と、世、の、人、多、く、免、ま、は、た、故、は、自、身、に、其、神  
 の、通、づ、る、所、を、い、は、れ、は、も、他、人、に、知、ら、ず、及、ぶ、事、な、り、上、古、山、川、草、木、ま  
 ど、岡、岡、と、人、希、と、密、な、ら、ば、山、魅、の、類、人、に、近、く、形、を、現、し、と、人、間、に、ま  
 り、定、る、人、皆、山、魅、の、為、不、を、知、る。後、世、人、民、怒、息、し、山、を、開、き、海、と  
 築、て、其、食、を、是、に、險、と、通、し、水、を、引、て、其、運、轉、した、り、す。人、形、を、自  
 ら、踐、を、ぬ、く、地、芽、を、か、ん、ば、人、の、心、より、て、居、る。龍、蛇、犀、狼、恐、れ、て  
 人、に、遠、ざ、る。山、魅、岡、兩、尤、も、靈、な、れ、ば、を、く、深、く、掘、て、人、間、に  
 近、は、ら、ず。後、の、人、多、く、目、よ、こ、さ、ら、う、れ、鬼、と、魅、と、の、分、を、あ、ら、ず、混  
 して、二、に、又、古、の、怪、事、を、傳、て、今、こ、さ、ら、を、い、て、疑、を、た、と、も、あり。  
 古、い、者、し、を、い、て、今、と、あり、と、て、理、を、証、ふ、り、あり。又、古、ある、の、事  
 は、今、も、あり。今、か、れ、の、事、い、古、も、な、し、と、い、つ、る、の、時、癡、を、さ、ら、ざ、る。夏



此の見たり毛髪は文りたがや天竺より近く間長生もあり求めずしてよく  
秘知。菓岳風とあり穴居をさる深山大澤何の怪なまゝとせん。昔  
本國に住まざる商客。本曾の妻籠とて雨の脚を傷り数日滞留。  
寒暑の異同も長夜の詭は尽。地を産物と計は介するお柄。其里は  
祖上よりえらく信る老人座よりわけて云。けを妻籠と名はつる。さぬぐ  
いこれあるゆへ老が先んどももつら信へる。世お河の傍とて田舎人の口鈍く  
流り出せる事性しくさしつれども。誠よよと手の奴露くはるて。あま  
某の深ふ足は自ら開の詭はあつと。清和天皇の時。美濃守源朝長  
頼を信濃守と特任やうとあり。其時使ゆれ。國空屋大領守。三  
頃守。廉。権門の吹撃よりりて信濃掾となりて。國から妻女を催。登  
せ。るべき家人等を百具して本國に路を赴き。日敷歴て飛段と信  
濃の界方の岐嶺の深坂よりわぬ。小笠原分。紗袖より。あけて。險き路

○英州帝後編卷之三

み歩。ま。び。み。歩。も。人。馬。共。に。疲。勞。と。び。る。む。い。う。ひ。欠。依。と。信。濃。と  
通路不便なりと。文武の耐。波。嶺。山。道。を。開。け。石。を。碎。き。橋。を。造。  
し。當時何と手に及ぶも。路。定。り。か。く。え。よ。う。此。山。中。烟。瘴。涼。く。蚊。蟻。出。  
没。し。付。来。ま。ま。か。く。人。を。控。閑。に。ん。甚。悪。而。さ。る。石。の。首。れ。山。中。へ。入。跡。こ  
ら。ら。る。亦。多。し。い。ば。こ。の。程。も。狩。と。名。と。し。所。あり。後。世。其。地。さ。う。う。う。  
と。其。懐。よ。一。の。洞。あり。隱。ま。れ。山。窟。と。い。ふ。た。い。務。ま。て。わ。そ。と。を。方  
格。定。め。か。く。救。十。と。ま。の。心。と。ぬ。く。わ。り。つ。れ。洞。の。中。は。宮。殿。か。ら。ん。こ  
と。あり。山下。れ。人。は。入。り。向。り。て。お。社。成。る。お。り。早。く。其。所。を。を。り。さ。る。若  
た。め。ひ。て。こ。と。あり。と。す。れ。ば。家。ら。空。より。大。石。を。落。ゆ。り。粉。碎。と。さ。る。此  
洞。ふ。一。の。怪。物。あり。あ。る。お。り。一。片。れ。雲。と。さ。う。て。飛。ゆ。と。な。よ。う。な。と  
つ。けて。飛。雲。と。い。ふ。其。本。身。は。蜘蛛。の。精。あり。神。代。より。こ。こ。と。を。津  
通。廣。大。變。化。き。と。あ。る。は。胡。文。字。務。を。繪。り。て。山。海。記。に。入。人。と。い。へ











守廉山路も倦はりて日も暮れしにけり。宿る。使者は  
 居りて休息し。飛雲宿の老翁とていふ。宿の  
 に出て物語し。昔今半千餘年耳の人の言はるる  
 ばはば。おのの用ふ立寄るも。殿のあふしき事あるを  
 向へて。盗賊狼の害多し。具や。はる女房のいふは  
 けり。なりて。殿向へ。歩みありて。多人数を以て追  
 へり。女と奪入るる山賊のあはれを。守廉冷笑て。し  
 かり。これ本末を。本國とて。武きりの。抄叙は。折  
 り。山賊は。用とて。殊は。天聽の命を。蒙り。固  
 我多事。取れ老翁。若黨一人。あふの家の子。かりと。後  
 詞。亭主も。其席を。追ぬ。若黨。執人の。端は。外。使女の。安  
 臥ぬ。守廉の妻の。白菊と。正面の。間。宿る。山中の。移







にちの世界してあに暮る娘女いふ身を換ても教道かりん。此方と  
かげき成をて我より身をさし長生を樂めと成たりて細やう  
よひて入む。白菊の波が吳梅よ思ろきけ氣と魂と守雲間よ死む  
まかりた。目よえぬ鬼のとりあひなくそらふるあかりのうら  
袋はよはし愛をに白ひ自はさうけ不の樂も成死守遠よ死  
せんて成念ど非及の振也わげ古成喰ても死ときととげき  
詞の悪はしゆん。白き身根よ黒き髪のはまきうり泣低し教  
乃に鞍の泪よ洗りけらうぬ悩り西施淳盧氏昭君出塞風雲  
容揚妃馬塊の愁眉もわやとふりまはしん天竺の國也とよせけ  
へ身とを失らさんと女房等よあせを誘わたりけあゆんと成の書  
つてまういざとて帳臺よ引んぬ。白菊是を拒て我を人の妻と  
して由かり不の帳内よ入ふべのどと。勢氣成はくひゆふ換て物

○英州帝後編卷之三

死雲笑て世人よ熟言べん。我の小室よ一睡してあ夜の方で息  
んとあさぎゆね女房の中も此花阿弥らうくよりてわぬのこ成  
つてまうかどあさぎゆねとあしりく久斯なりうへ長くうなると淫  
かたしとらり。昔より車き新様とていからとさげどしてとあさ  
又新も皆厭ね中とさめさるる流来て。逃ま出んとこと  
て我度かねど中の方格を流ど。終つては旧の路へくう逆よ  
出るとあさぎゆね既よみよ春成るう。此方の今愛紀を初て足  
らるあひの下く。かあむくほけき鮎よあさすともえより女の男は  
醜を論ぶべきのみあさぎゆね。愛化里よ出ておつ時い甚さ友優よ  
ましく國司の形骸をなす。其人相とぐれてうり。たあ流どとい  
れかさうて流りや。朝夕よ訓まてこそあ流。彼かかよ流。は彼まき  
かを用てめらみわたりむ。されんあそまれくかかきも死とんきと命と



ぬをみりかたれば瓜むさかり。うらる風のそよ吹き。一水の海  
波を舟と待身とにかりぬ。又從はばは若成あへはくく懲しり。  
遂は妖術は惑く誘ふ。人きくらの早くはよをぬねとつらな  
と。和くふそむいれ。白葉答へんせ縁を。女房ども詞にきて並  
の人心はあらずと。Pきこめ。飛云今ハ大いうて。白菊を下家  
止。洞の中れ用水を遠きん汲く。衣服を洗入賤の役とるこ  
し。白葉却てこそと。うらきまよひ。日くみ茶ふりて水と汲  
と衣をあらひ。げいやしき紫をかねも。身と汚を。はははさりぬ  
心は是りて抜口の土神を祈り再び家へぬじれ。人とおせぬ白  
かりき。洞の中りぬ。是は。月のあき。は月のあきと。三月  
月の後。飛云は其容色の蒼くは。悪人て。成廣ひ。まぐ。縁狂  
をゆりて。銀を。表りぬ。一日。有。痛。宴を。設けて。は。成。奇。は。白

英州前後編卷之二

菊を酌し。高しむ。寢堂の縁。村山花。梁。梁。梁。の。行。な。ぐ。宴。よ。傳  
て。其。縁。の。女。縁。小。葉。ひ。け。は。縁。ひ。真。ある。席。は。白。葉。志。き。り。に。眠。と  
傳。と。う。愛。に。が。女。う。り。相。押。て。戯。あ。を。目。の。不。祥。は。は。と。り。と  
俯。つ。ま。酌。と。く。り。か。め。う。ぬ。う。け。酒。を。こ。が。も。も。あ。ま。ま。飛  
雲。く。く。わ。く。罵。り。奉。と。あ。げ。撲。んと。せ。う。け。罪。科。は。此。座。より。重  
よ。答。二。つ。あ。や。この。瀧。を。汲。て。来。ま。と。ま。り。ぬ。白。葉。は。う。美。あ。わ  
ま。ら。せ。り。と。身。れ。罪。を。ち。り。桶。を。肩。は。て。蹠。を。ち。り。は。れ。は。澄。ひ  
ら。や。桶。小。躍。て。と。へ。と。げ。世。か。く。ぞ。も。あ。や。せ。あ。ら。な。今。あ。と。お。と。成  
就。る。様。ち。り。の。愛。に。が。今。角。女。乃。う。と。勝。か。た。れ。も。ま。経。り。る。ま  
し。な。く。ん。う。ら。そ。死。ん。命。を。ほ。ぎ。と。な。り。た。人。の。果。と。こ。と。へ。と。と。こ  
ぶ。是。か。この。み。あ。き。う。り。の。泣。り。う。成。二。の。桶。よ。く。の。が。せ。た。め。れ。よ。と  
休。む。る。あ。珍。じ。や。其。こ。の。う。世。れ。中。の。人。と。そ。い。ふ。は。う。小。人。ま。ま。ざ。り。し。







よ遠て次へ出され。浴便桶を之何の酒宴の席へ出せしめぬくも怪  
たぞども言系禁制せしり。又傍よりこころなりし。後方ま  
とてちのりげふ桶をこそよりし。髪を弄させ別るに隠しを  
一因ふ笑をゆるされ格て愛とあげり。これ若狭人のあざむきと  
り子戯とかり。此れえ。斯え又れもみまて。雲鳥の音起霜雪よ  
其時をさひしれて十ももなべ。故にうらぐみやる父母ら  
いとこふ思ふのうらむねば新きてぬべき命うやとふ。極言ひし  
ぞふは負ふに彼人のあざむきもれ故にに送りし。美やる面妝  
あも。遠ふくんつる。思ひこ。式衣諸寝の差破も。アレルをうらむね  
い洞の内悔し。さうとらり。たむねと。元人の力も。めつぐ。又是な  
子眼をふ。又の家より。婿が杯の途へら。興を踏より。横きう。れと  
下めむ。こ君の家よ。あるとの。さひら。うらむね。おれあり。庭と。車と







遂に其討衛と云はるるのたしと説をばて白く染むる方成はく  
言多かり。飛雲も女成到つらんといふ氣をうり。死言を乃つて  
て説いざるも。女の心はゆきさぬ方成の意も志も水の形も  
くして取定ぬれど。さへまらびやとたぬのへり。さふれをゆる  
ぬ千鈞の弩の一重乃信を穿ぬる理もどく

白染の下

却説守謙の妻女を考ひてより。枝葉の谷家ユつぎよる険石  
をさぐる。飛弾信濃の山中をこり。町をたぬ。三日六日。是とどち。つ  
をのぎりとく。掃ろく。春はけとく。本ど人をけけ。掃ろく。花を  
踏ふ。谷水のほきに。夏ををぬ。又まらる。幾らの家とほきを  
空し。つよは。城のまをる。福ど。今羽ふれば。本曾の伏屋の竹ぐ  
ら。撓る。雪と踏と空がれ。又まらる。ゆきの。急げんとく。ふんせう。















ありん。ちんはも我と来一万事。このわかれは道人の卦よりくる  
 し。いせん人界を看ぬく。色慾の迷ひ多し。思ふく徳を授くる  
 可わん。又るはくひのぬ人を相せむ。人面相と命ねあてうと再  
 び其支干を問ふ。固くわると答ふ。道人卦を設けて云。内は懐て替  
 と差ひ。外は貞祥を失ふ。火の本より炎を成す。改めず。中し  
 一人の婢とかりて其家より去る。天名逆侍。命して金鏡巻續て  
 引せよ。道人を頼る。一事あり。我後一家卦のてく。あか又是とも  
 近は一つの世せざるを頼る。今日致電の法舎。一説て此れをわん  
 と存ふなり。人云。やを。曠時の壇に登まこと。俱は法舎ふ。あ  
 てわり。火と茶葉を付して侍る。況は壇より讀經の室をた  
 り。香をひわりて。南無十方の諸天。此一柱の香。四海安靜。又  
 登この教昭明。聖れ君敬多うれ。又一柱拈て。十方施る。後徳  
 六十とのう。云

○英神帝後編卷之三

般若と樂。又一柱を焼て。今け甲子の貴人如意。是なり。あま  
 態又祈り求る。糸信の衆籤を拈て。其籤の辭を求む。若人の籤  
 六十とのう。云  
 彼の衣より日詣てあをうり。紅の衣を襲衣とせん  
 女房の拈る九十四籤云

あまたり。り。のみ。のり。あ。人。い。ふ。と。せ。の。命。有。く。と。ま。き。け  
 乃人壇を下て。考ねて。は。と。あ。り。若人頂戴して。怪む。鉢をす下  
 向る。乃人徒。牙。命。と。玄。因。と。送。じ。じ。守。り。の。歴。の。武。家。系  
 諸とて。これ。彼。が。ゆ。を。侍。て。道人。と。れ。む。き。て。あ。ま。り。問。代。隔。て。立  
 かる。彼。今。を。ふ。空。親。む。た。ま。の。後。小。流。い。ち。ぬ。人。と。す。く。失。る。我。女。房  
 かり。大。一。登。き。変。に。し。た。わ。で。け。え。た。の。仕。業。な。り。乃。誰。も。あ。れ。眼。あ  
 の。然。敵。脱。すと。お。法。より。移。し。いと。定。め。受。て。も。縁。の。一。子。三。葉。は。



珠にぞく。多のや。くのひびし。つらぬて。とまほと。大やもく。くたのよ  
して。換り。ぞひ。續て。ある。成者の。ひふほひ。間も。なく。まる。この。矢と。けふ  
く。つて。嗚。こひ。と。こ。れ。を。り。に。射。る。矢。と。悉く。拂。の。け。り。身。の。あ。さ  
ど。守。慮。着。忙。抜。設。て。切。て。ころ。と。大。名。き。り。と。さ。む。く。眼。の。ひ。ろ。一。身。の。切  
れ。く。是。へ。ど。居。ど。く。す。り。て。秘。き。ぬ。ど。白。業。い。り。と。う。り。と。い。ん。た。是  
り。又。神。色。也。と。言。系。り。て。あ。り。ひ。ろ。太。名。怒。の。相。と。似。し。係。女。房。ふ。念。ふ  
く。還。り。職。に。就。ぶ。か。女。子。は。仁。ま。は。た。ま。は。後。に。放。ら。ん。と。い。ふ。ま。さ。あ。く。い。せ  
く。と。時。あ。る。か。げ。う。さ。ひ。わ。て。盡。く。官。府。に。入。り。大。德。進。又。と。と。あ。わ。れ。女  
と。い。は。れ。木。杓。ま。は。る。と。ひ。く。ま。の。家。人。中。と。死。せ。て。是。を。く。い。ふ。不。其。ま。や  
の。と。と。と。退。て。ゆく。守。慮。が。面。と。搦。め。り。小。家。の。ゆ。た。大。石。室。より。さ。う  
と。藩。家。地。ひ。き。た。肝。に。づ。け。て。鹿。の。ふ。て。り。起。る。時。早。く。怒。え  
へ。ど。何。人。の。目。も。涙。の。途。ま。で。終。る。と。い。ふ。忽。ち。よ。る。と。い。ふ。守。慮。共

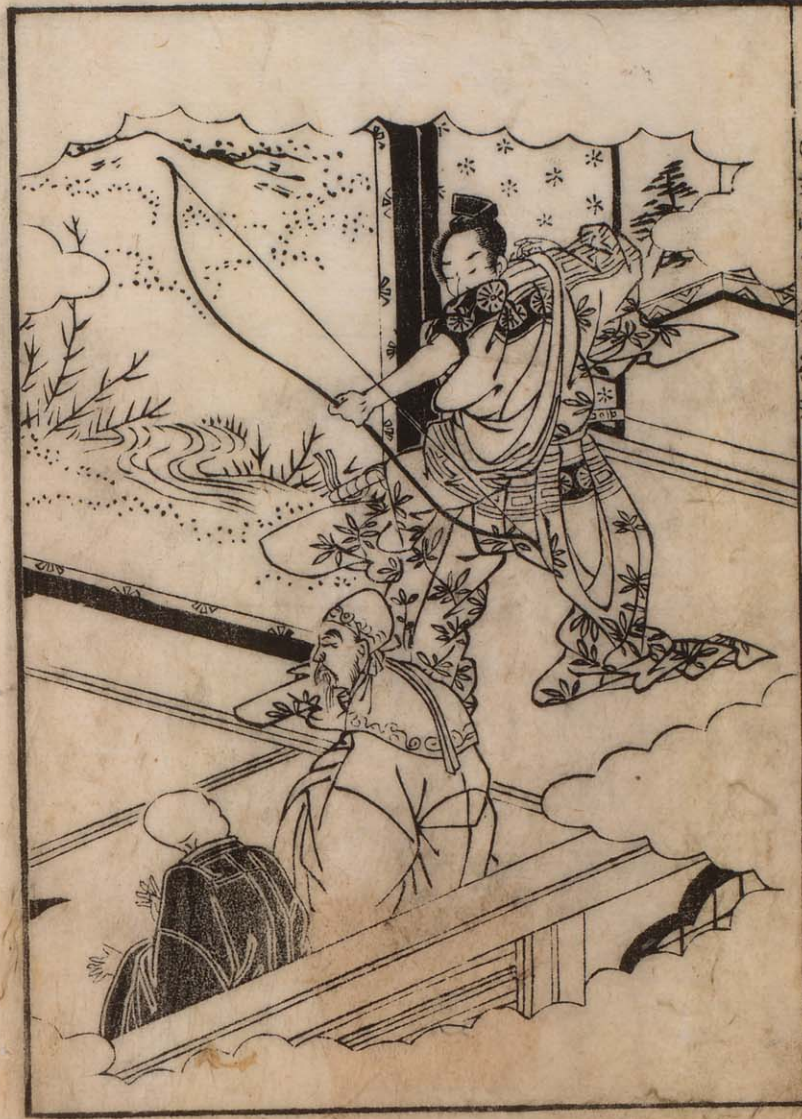
○英州帝後編卷之三

兼い。寺。内。に。一。宿。し。と。氣。を。善。い。は。怪。物。の。業。と。わ。り。目。は。こ。ろ。う。女。房。と  
ふ。の。へ。さ。う。成。談。会。ま。と。と。是。も。真。の。白。菊。な。く。わ。れ。く。め。つ。め。つ。と。さ  
人。ふ。も。や。う。と。を。怒。ひ。す。も。理。り。た。り。の。て。白。菊。へ。と。は。ま。又。違。な。う  
言。系。か。く。別。と。乃。と。が。う。さ。は。此。交。化。い。ろ。種。あ。り。て。名。知。識。の。た。ゆ。も  
悪。の。相。い。た。く。人。な。り。ぬ。と。あ。れ。ば。神。の。化。現。し。と。あ。り。わ。守。り。ど。の  
力量。も。矢。も。逆。より。と。あ。り。だ。我。女。の。身。と。て。計。抜。の。か。り。き。や  
な。し。後。ま。の。旅。に。入。る。は。ゆ。ら。ん。と。言。ふ。身。は。汚。さ。ど。ん。は。快。意。後。後  
を。も。と。う。ほ。う。ま。ひ。て。結。句。教。さ。り。時。あ。る。と。海。路。に。体。し。入。業。也。と  
ひ。ひ。て。是。と。の。不。足。と。危。を。げ。く。死。雲。と。詞。を。る。り。あ。身。不。進。く  
奇。眉。を。ま。さ。ば。我。と。な。し。は。む。か。げ。だ。さ。中。ま。は。と。て。你。が。貞。心。を。壊。て  
奪。へ。び。き。ふ。と。あ。う。す。と。と。P。ル。序。白。業。洞。ふ。り。て。より。女。を。く。い。言。ま  
し。と。一。徳。の。も。と。も。は。と。あ。れ。は。ば。我。通。力。よ。終。き。て。女。が。心。知。き。こ。り



遠くを歩きてくけたりと悟りぬ。程も女どろむ白ひて我  
出射と流て之。我の林世よりいふは棲て己は二子也。昔一太公の林  
説きとされて天孫小波ひけ邦守後の林の敷もつらづらうと。乃の  
不徳を叫つとを接返し。我ふも成からてなうす。我流れぬく  
乃は霧をふじて人間よりせり。永くくわりて世の事ふあづら  
流は。我を流さくとも。心て勅役のてる。皇孫に射して反心  
れば。其餘の事へ怒りあづらひ。むらう。取多の女を撮て身り  
たはひとれ。七人の園敷ふ石れ粟へ。天蒼君氏の賜ふたの春なり。  
婦女は車もえとまき。ようあぶきを巻着のる。ねとく。く。酒は  
ある。つら。心。死て。返り。叫と。人。き。も。多。く。い。命。取。り。た。昔。より。心  
四山下れ里くに。物と名。だけ。て。少女を。供。て。い。皆。我。流。る。あ。ま。ま。と。ま  
多く。い。足。村。女。か。れ。む。じ。も。欲。せ。る。う。白。流。は。其。事。と。ら。る。り。右。い







我も乃よ形を仁双して下れ男となる女なるに必りせんとのこ  
 ろろくも。我徳をいづれて形はくろとれい下下卑きまぢわれ  
 心。里に出て在る時たうては容儀をふとと足とくうぬおのころ  
 實り守固の人たうん。白糸をふたを多く女房影ふをたう  
 たん。此の寺心は宿り守と。明と道入よつとぬいと。道人  
 教と大いづら。今日まはの相をくらんきのやとふ愛と眉し  
 けも怪ふべし守と。昨日今日いんど相のまどるものぬれどく  
 かりや。道人をいれり又其心をささるべし。再び暮を抽き卦を  
 爻て之。移鶴氷を棒て候も風は異らる。足春風氷を解のとも。足  
 下夫婦院聚のた文かり。怪しむべしと。眼を困て休と出ま利  
 ふありふと眼を困れ。守とふさくといつ。お宿茶飯あり。は怪お友  
 干甲子かんと丁酉をわて候ととき機あり。休が妻の丁酉ハ火の



甲子金のの運んり。燄か火かをて天あま金か成なり清きよと一生いっせいの厄やくくん足あ大だいねの縁ゆかりの  
りて其その完かん業ごうを消しょう却たか見みとする所ところなれど。婦おんな人ひと貞まこと実まこと女むすめをたやくは  
どかぬれ。害あやまあるめとほくぬらる。完かん業ごうはす不ふ淋りん通つうも及び守まもり  
のほよれ。女おんなを淫いんへんら。法はふ念ねんの糸いとトより。爰こゝに悪あく行ぎやう貫くわん盈えいとと  
ス。此この縁ゆかりをこび。げんじつ。も。亡な時ときも。今いま卦くわいの爻えんトより。伏くつ  
ひて之これを。今いま々げんげん縁ゆかりを。遂ついす。とある。是こゝ又また殺ころせの法はふの應おう該がいあり。不  
可い思し議ぎの妙めうを。さ。ば。更またぬ。再また會あひまの。後のち足あを。ひて。ん。伏くつこ。ま。し。ん。  
ん。び。再またび。押おした。足あ下げの。め。よ。は。力ちからを。施あづかす。守まもり。と。え。何なにれ。其その會あひまの。り。ん。き。  
我われ丈ただ先まへの。身みと。して。彼かを。除たす。と。あ。り。ん。ふ。言いん。や。女むすめと。や。び。今いま月  
志しを。り。さ。る。は。乃のち乃のちの。女むすめの。み。ん。を。き。ん。あ。は。は。道みち人ひとを。と。張たて。て。即すなはち  
壇だん小せうを。り。餐くわんを。披ひ下げ寶ほう劍けんを。把とて。口くち中ちゆう咒じゆ詞じを。念ねんふ。概がいを。香かう煙えん内ないみ  
燒や大だい喝かく一いつ夜やと。忽たちち。と。て。腹はら中ちゆう昏こん黑くわく一いつ陣じんの。怪くわい風ふう起おこる。守まもり。壇だん辺へ

○英州帛後編卷之三

に備ひ伏ふくして。又またも。も。る。不ふな。し。只ただ道みち人ひとの。な。り。と。燒や雷らい公こう今日けふ  
け山さん精しやうを。撃うべ。雷らい云いの。難なんん。ど。い。は。小せう勝しょうと。あ。り。さ。る。が。な。か。う。ん。  
今日けふ大だい教きやう到たうる。撃うべ。必かならず。必かならず。言い下げ。忽たちち。壇だん上じやうより。閃せん電でん起おこて。一いつ陣じんの  
霹ひ靂れき雲うん間かん。震あふ。漸しだく。腹はら中ちゆう暗あんて。目め氣きを。さ。る。人ひと守まもり。と。い。は。て  
云い雷らいの。發はつせ。方はう格かくを。求もとめ。ゆ。ん。必かならず。終しゆうわ。ん。守まもり。と。一いつ陣じん。一いつは。は。は。  
者ものを。具ぐして。峻しん峻しんを。返かへき。實じつの。空くう音おんさ。る。こと。と。て。や。り。さ。る。す。り。ゆ。り。  
と。霧きり立たち。あ。り。谷や男おとこ。つ。つ。り。晴はり。ち。て。お。り。さ。る。人ひとを。べ。き。な。り。あり。ま  
る。不ふの。沙さは。は。や。ふ。傍はたり。と。名なと。あ。れ。木き衣いの。花はなと。つ。つ。く。と。衣いと。衣い  
ゆ。ら。ぬ。是こゝ死し雲うんが。た。り。と。女むすめと。優ゆう世せと。さ。る。た。り。ち。の。ち。わ。く。と。ち。下  
り。て。ね。ま。の。ふ。成なり成なりと。さ。る。あ。り。白しろ葉は敷し人ひとの。女むすめ房ぼうと。す。と。此こゝに。は。あ。り。ん。と。ち  
ま。て。再また會あひまの。怪くわいび。あ。り。ん。と。い。は。は。と。回まわり。白しろ葉は敷し人ひとの。女むすめ房ぼうと。す。と。此こゝに。は。あ。り。ん。と。ち  
ま。て。今いま雨あめな。れ。空そらに。鳴な神かみの。物ものを。と。ち。く。洞どうの。上うへに。落おち。り。ん。



此を撃殺せり。固てワ紙く里をさして出るべし。うぎに霧くはいたし  
さうりといふ。守しと大に恨び女くく白業もふ。家人を分ちて里より遠  
居り。其身には深くはる程に。なはつとざり。一ふの半後、廣き山居空  
り。其内は石をたき木を焚きて、錯の結構あり。山居空のるは、  
まじこそ、爰にうとそりて、其長一丈ありの異形の獣、雷火と燃と  
て、褥の上より死せり。布ら首瓜切てあり。さる細よる、故もさび。山居と  
川は、まして廻廊のあた家、ぼろろ。一画、子障より、同成り。何れ、  
女の鈴、局や、所なり。正、居れ窓の下に、張と、飾まる。細一振あり。鈴と、  
を陽の影なり。鞘をぬきて、るる、今、何のり、あわは、鈕の、さう、さ、  
や、併、か、山居空と、ぼろろ。一細よ、く、細、さ、さ、よ、い、怪、物、と、  
そ、か、後、布、財、器、お、多、あ、れ、く、を、を、さ、す。洞、の、内、火、を、放、ち、て、  
して、立、降、り、國、司、よ、あ、つ、て、娘、を、語、り、虚、病、で、分、説、を、ら、ん、國、司、

○英紳帝後編卷之二

布代の事、よひて、人、を、許、し、と、り、り。白、菊、あ、ま、ゆ、り、て、よ、り、病、し、所、  
く、怪、り、り、る、之、依、道、人、の、靈、符、を、お、り、て、平、愈、せ、り。ま、如、寢、之、序、  
り、て、道、人、は、謝、し、布、百、疋、と、進、む。道、人、今、や、世、財、を、ま、て、用、な、し、と、  
匹、を、留、り、て、服、用、し、と、尚、示、し、て、い、つ、世、れ、人、陰、陽、の、理、よ、う、と、  
後、て、恨、む、冤、家、相、得、ぶ、ん、を、其、持、用、り、ん、お、つ、て、逆、を、と、つ、て、  
一。是、天、地、の、消、息、な、る、其、内、よ、か、の、速、速、強、弱、幸、不、幸、尊、卑、内、の、貞、  
堅、か、も、洞、よ、い、て、後、日、日、よ、死、の、一、字、を、ゆ、り、と、お、り、し、と、  
せ、り、れ、る、か、ら、ま、ぬ、聴、て、誅、殺、服、し、て、返、く、是、より、本、身、山、中、  
ま、か、く、山、夜、ま、あ、る、ま、た、く、進、ま、様、人、賤、の、男、女、と、  
ある、本、身、の、は、坂、ま、れ、り、妻、妾、の、名、の、よ、馬、鹿、と、  
宿、せ、り、と、兔、角、の、あ、り、と、月、日、と、て、早、く、も、  
後、ま、ぬ、菊、の、切、り、と、月、の、懸、服、を、



後で此婢毒の毒はほろりしてその毒の念もろりて燃うす。人々貞節  
に恥しめる。終身の疵痕を執るのこゝ又いとどとるべしのこゝわす  
や。種々の首を館の後よびて。自ららととりて見くられ。射とて年  
おろしに眼をりくさくさする。其の如く後世猿掛乃岸とてPよりとる  
て西國のてかんを。それとて老いあらずと語りつけらるとかん

古今奇談鼓野話第三卷 終